

乳児用調製粉乳調乳過誤発生後の対応に係る追加報告について

平成 26 年 1 月に北里大学病院ホームページに掲載したとおり、調乳過誤事案を発生させ関係の皆様にはご迷惑をおかけいたしました。

[平成 25 年 9 月 6 日～11 月 17 日の期間に提供した乳児用ミルクの濃度が、誤って規定の濃度より 3.0%～5.6%低く調製されていた事案]

この事案の検証として、院内で哺乳した児に対する影響について外部の新生児専門家の見解をお聞きすることにしておりました。

このたび外部の新生児専門家の「児に対する影響調査意見書」を受理しましたのでここに報告し、改めてお詫び申し上げます。

病院長 海野 信也

【調乳過誤事案における児に対する影響調査報告書への外部専門家の意見書】

まず、調乳過誤による影響について極めて詳細な調査を行ったことに敬意を表します。

最低と想定される 12.39%調乳濃度であっても今回のデータからは、新生児に対する有意な影響が認められていないことは明らかですし、調製粉乳の許可されている栄養成分量についても報告書にもあるように満たされています。

今回の調乳濃度の乳汁が、長期間与えられた場合の影響については明らかではありませんが、許可範囲内の栄養摂取量を与えられ、かつ2か月程度であればまず影響はないものと推測します。

一般に母乳栄養組成は、一般調整乳とは異なり母親によっても、また1日のうちでも、さらには泌乳期によっても異なります。蛋白含有量は初乳に多いのですが、その理由は栄養として利用されることが少ない免疫防御物質が多くを占めているためです。初乳中に多かった蛋白含有量も成熟乳に移行するにつれて低下していき、一般調製粉乳の蛋白濃度に比べ低値となります。それでも母乳栄養児に栄養障害が少ないのは母乳蛋白の生物学的利用率の高さが関与していると考えられます。今回、調乳濃度が低かったからといって、一般的な母乳中の蛋白含有量に比べれば明らかに高く、生物学的利用率を考慮しても蛋白質不足が出現するレベルにはありません。

また、最近、欧米では人工栄養で哺育された児は将来の生活習慣病のリスクに関連することから、一般調製粉乳の蛋白濃度を減量する方向となりつつあります。このような動向を鑑みても、今回程度の調乳濃度が問題視されるレベルではないと考えられます。エネルギー摂取量についても同様です。

低い調乳濃度は蛋白質やエネルギー摂取量のみならず、他の栄養素の摂取量にも影響するわけですが、今回の程度であれば、繰り返しになりますが摂取許容範囲内であり問題となることは少ないと考えられます。

平成 26 年 10 月 31 日